



あんこう

第4号

平成22年3月発行

「あんこう」は、オオサンショウウオの当地方の呼び名です

巻 頭 言

シリーズ理事長の足跡

オオサンショウウオの調査研究（4）	_____	1
〈ハンザキ研の100年後を夢見て〉	理事長 栃本 武良	

地域環境・地球環境

オフセット・クレジットを活用し山村の再生へ	_____	3
生野鉱山だってジオパーク！？	_____	5
	理事 淵本 稔	
	研究員 宮崎 隆史	

特集（オオサンショウウオ保護保全に携って）

はんざき調査事始め	_____	7
オオサンショウウオ ねえ・・・。	_____	9
オオサンショウウオとの運命的な出会い	_____	11
	研究員 岡田 純	
	研究員(理事) 中島 悟	
	研究員 田口 勇輝	

イラストスケッチ

ハンザキとのであい	_____	13
	研究員 長谷 愛子	

連載（オオサンショウウオの古名と地方名）

(5) 『江戸後期諸国産物帳集成』にみる 石見、安芸のオオサンショウウオ	_____	15
(6) 岐阜県他の資料にみるサンショウウオ	_____	
	研究員 池上 優一	

イベント報告

キノコ観察会	_____	19
黒川秋の陣「あんこうウオッチング」	_____	20
黒川秋のエコツアー	_____	20
ひょうごエコフェスティバル2009	_____	21
三井物産環境基金助成団体交流会に参加して	_____	22
	事務局長 奥藤 修	
	事務局長 奥藤 修	
	事務局長 奥藤 修	
	事務局 藤原 進	
	事務局 黒田 哲郎	

雑言・提言・独言

地域まるごとミュージアムを目指す	_____	24
	事務局長 奥藤 修	

話題など

あんこうクッキー	_____	25
『のりこえ枰（マス）』秘話	_____	26
	理事 斉藤 敬子	
	理事 竹村 真澄	

編集後記とお知らせ（編集長 竹村 真澄）

巻 頭 言

NPO 法人の認証を兵庫県から頂いて2年目がまもなく終わります。支えてくださっている会員の数も目標の200名をはるかに超えて260名に達しています。初年度では義理や最初だけとは言う支援もあったことでしょう。それも大変にありがたいことです。なんだかわけもわからないNPO 法人に対しての、個人的な付き合いの中での応援には感謝するのみです。

会員の会員同士の情報の交換には、この会報“あんこう”は最適な場ではないかと思います。これまでは、原稿執筆の依頼を周辺の方々に無理やりお願いしてきましたが、年間2回の会報の発行に際してはできるだけ多くの会員に投稿をお願いしたいと思っています。気軽に、考えていること、会への思い、期待、何でもかまいませんのでお願いいたします。できるだけ多くの会員の方に登場していただければそれだけバラエティに富んだ会報になっていくでしょう。

NPO 法人の維持運営にはなかなか煩雑な事務手続きもあります。不慣れた事務局員のボランティア活動によって支えられている面が多々あります。年々の兵庫県への年間報告や収支の決算などと共に、いかに広く広報し当法人の活動を知っていただけるように努力していきたいと考えています。次々と設立されるNPO 法人が、維持運営できなくなるとは消えていくそうです。ハンザキ研におきましても私以外のスタッフは皆仕事があって、その合間に色々な作業を分担しながら、イベントなども参加できるメンバーを募っての開催です。ハンザキの寿命の長さに負けないくらい法人としての活動を継続させるには多くの会員の皆さんの支援が必要になります。

今年の第2回通常総会はハンザキ研のミニ・ホール（体育館兼講堂）で開催いたします。年に一回くらいはハンザキ研の整備状況を見ていただきたいという強い思いがありますので、その折には是非ご出席ください。

平成22年3月31日



NPO 法人 日本ハンザキ研究所
理事長 栃本 武良

シリーズ理事長の足跡

オオサンショウウオの調査研究 (4)

〈ハンザキ研の100年後を夢見て〉

理事長 栃本 武良

1975年(昭和50年)に生野町の市川でハンザキの生態調査を始めてから36年目に入ります。個体をいかに識別して追跡できるかと言う問題から始まり、調査用具の開発など様々な難問を乗り越えてやってきました。長く続けてきたと言うこともありますが、現在までに1,486個体を登録することができました。無論この数字には確認した死体の数字も含まれていますし、確認できていない死亡個体もあるでしょう。しかし、1998年から使い始めたマイクロチップによってその内の800個体を超える登録ができました。つまり、登録したものの半数以上はこの十数年の間に生存が確認できていると言うことになります。最終的にはマイクロチップ登録個体のみを追跡していくこととなりますが、それでも調査の初期に写真登録してある個体が再捕されると20年30年と言う追跡期間になりますので、当分の間は写真照合も並行してやっていくつもりです。このところ、ほとんど夜間調査を実施していないので登録個体数があまり増えていきません。何とか1,000個体のマイクロチップ挿入を目指して頑張りたいと思うのですが……。

一方で生まれた年の分かっている幼生の飼育には力を入れていますが、5年ほどで鰓が消えて変態が終わる全長20cmほどまで成長すればマイクロチップの挿入も可能になります。5年の飼育と言うのは大変な長さです。しかし、これらの幼生が成長して生き残り100年後に再捕されれば素晴らしいことだと思います。誰がその幸運にめぐり合えるのか私は知るすべもありませんが、まだこの世に生まれてきていない次の次のまた次の世代の人になるのでしょうか。そこに至るまでの現役の人たちから子供たちの世代へ確実にバトンが渡される必要があります。ハンザキ研のような組織の中でのバトンタッチがうまくいけばベストで

しょうが、そうでなくとも1,000個体の情報を公表して残しておけば、いずれ誰かが受け継いでくれるものと思います。そうでなくてはいつまでたってもハンザキの年齢や寿命が分からないままで、折角の日本が世界に誇れる水生動物ハンザキも嘆くことでしょう。

私が姫路市立水族館時代から続けている調査水域は、市川の生野ダムから上流部の本流10kmと流入する10の支流を合わせて約25kmの範囲です。上流は黒川ダムで仕切られていますのでかなりの程度で閉鎖された水域と言えるでしょう。この範囲で全長30cm以上の個体が約1,500匹も登録されていると言うと、そんなに沢山生息しているのかと驚く方が多いのですが、実際には登録されていない個体はもっといるのではないかと思います。さらに次の世代を構成していくはずの幼生の数は何倍もの数になると考えられます。河川生態系の頂点にあるといわれているハンザキがこんなに多数生息できる河川は、それを支えているあらゆる階層の生き物が豊富に繁栄していると言うことを示しているのです。ハンザキだけを保護すると言う考えは偏ったもので、ハンザキは豊かな自然環境のシンボルとしての存在です。多数のハンザキが今後も現状を維持することができれば河川の豊かな自然も保全されることとなります。このような意味でのコウノトリやトキ、ハンザキの存在は象徴として大きな存在であると考えています。これらの特別天然記念物としての指定に答えることができれば日本の自然環境も安心ですが、まだまだこれからの状況だと思っています。

ところでハンザキの寿命は本当に分かっているのでしょうか？ 現在の所、江戸時代幕末にシーボルトがオランダに運んだ個体が、51年生きていたと言うのが最長飼育記録です。シーボルトが長崎の出島から江戸の将軍に表敬訪問の途次、三重県の鈴鹿峠で日本人の弟子が捕まえたハンザキは全長が30cmほどといわれ、これがオランダに運ばれたと言う説があります。しかし、現在オランダのライデン博物館に30cmのきれいな標本が残されています。日本から追放されたシーボルトは2

個体（オスとメスと書かれた文献がありますが、どうやって見分けたのか疑問です）を持ち出したものの、航海の途中で大きい個体が小さいほうを咬み殺した（オス同士だったのかもしれませんが）といわれています。そしてライデン博物館には咬

で原状復帰させました。21 歳ですが全長は 98cm 体重 7.4kg にもなっています。このように餌しだいで成長には大変な差が出ますので、全長からの



全長 30cm の標本（左）と 70cm 以上の咬み傷だらけの標本（右） 藤田 諱氏 撮影

み傷だらけのシーボルトのハンザキ標本が残されています。その標本に物差しを付けた写真から全長を測ってみると 70cm は確実にあります。この個体より大きいものが生きてオランダのアムステルダム動物園で 51 年飼育されたと言うのが真相のようです。70cm 以上の大きさになるのに何年掛かったのかわかりませんが、50 年かかったとすれば、100 歳以上になっていたということになります。ただし、死亡時の全長は 120cm ほどと言われているのですが、標本が残っていないのは残念なことです。

長寿記録として 116 歳で死亡したと報告された岡山県の“新庄の大ハンザキ”は、捕獲時の全長 40cm を 40 歳としての計算で、しかも引き算で余分に 10 年間違えての計算になっています。姫路市立水族館で満腹テストをした結果では 3 年で 30% に育ちました。また、8 歳のときに右前肢を咬み切られた個体が再び指まで再生して昨年、ハンザキ研の横



右前肢の再生状況と X 線写真

年齢の推測は無理なのです。水族館での飼育結果や野生の変態前後のハンザキのサイズでは 5 年で 20~25cm です。この変態時期頃までの年齢推測は体色や鰓の状態、全長などからほとんど誤差が無く考えることが出来ますが、それ以後では不可能です。ですから、40cm=40 歳という断定はできませんので 116 (106?) 歳と言う年齢は全く信憑性がありません。また、飼育者が変わってしまうことでも本当に同じ個体かどうかの確認が難しくなります。

昨年にも山口県において 95 歳で死亡したと言うニュースが流れました。これも同じ個体であれば、私が頂いていた情報では 20 年前くらいに 30 年くらい飼育していると言う話でしたので、50 年くらいなのかなと思います。51 年以上と言うことが確認できればシーボルトの記録更新になったのですが、やはり個体識別の重要さが思われます。ヨーロッパではハンザキの仲間は絶滅してしまっているのです。シーボルトのハンザキ 1 個体ということで確実な飼育記録と言えるでしょう。日本動物園水族館協会の記録では、むろらん水族館で 48 年間飼育（全長 109cm、体重 19kg）と言う、あと数年で記録更新できたのに残念ながら死んでしまったのが最長だと思います。これらの 95 歳にしても 106 歳の個体にしても、そのくらいの寿命は十分可

能性のある長さでしょう。しかし、本当の年齢や寿命が確定するまでは、まだまだ長い時間が必要だと思えます。

このような長生きをする生き物の研究は、研究者の方が先に死んでしまい結果が残せません。私にしても人生のロスタイムを突っ走っている状態ですから、この先の追跡は高が知れています。これをクリアするには、人間の方が数代を掛けて対抗していかなくてはならないでしょう。そこで、一人で楽しんでいるだけでは駄目だということになり、組織を固めるべく NPO 法人にしたのでした。多くの会員の方々に支えられながら、ハンザキ研を整備しながら若い人たちへのバトンタッチを何とか達成したいものだと考えています。私が 40 年近い時間をかけてきました。次の人が同じく 40 年間調査研究を継続してくれれば 80 年になります。更に次のランナーが 40 年走ってくると 100 年を超えてハンザキを追いかけることが出来ます。私が登録して追いかけているハンザキで最長期間は 32 年目の個体です。30 年を越す個体は 3 匹のみですので、なかなか難しいかもしれませんが 100 年後にはかなりの成果が出ているものと期待するところです。夢のような“夢”ですがゴールを目指して多くの皆さんにバックアップしていただければ可能でしょう。

ハンザキを 100 年追いかけるのと同時に、ハンザキ研が 100 年間維持されれば、地域の活性化にも大きな役割を果たせるものと思えます。目下は無料開放の形で見学に来られる方々に対応していますが、整備が進めば有料施設として地域の皆様にも働く場ができますし、スタッフも充実して環境学習の拠点としての活動も出来ると思えます。現在の所はスタッフはもっぱらボランティアとして頑張っているのです。共通の目的を持って突き進んでいるという状態です。皆、100 年後の姿を見ることはできないでしょうが、その種まきをおかないといけないという信念の元に活動しています。それにしても気の遠くなるような話ですが、これが実現できるかどうかは多くの方々の理解と協力があるかどうかということになるでしょう。

昨年生まれたハンザキの幼生が、厳しい河川環



ハンザキの 0 才幼生

境の中でこれから 100 年以上生きていくのも至難の技ですが、ハンザキたちが生き延びていくことができる河川環境を、最低でも現状より悪化させないことができれば、生きている化石たちも本物の化石にならないで生き続けることでしょう。河川環境の保全是人間側の責任です。オオサンショウウオが多数生息できる河川環境は、全ての生き物が豊富な自然豊かな環境だと言うことができます。私たちの時代も、次の世代にもこのことを伝えていかねばならないと思えます。



地域環境・地球環境

オフセット。クレジットを活用し山村の再生へ

理事 淵本 稔

内閣府がまとめた「国土に占める山村の位置づけ」によると、山村とは旧市町村ごとに林野率 75% 以上、人口密度 1.16 人/町歩未満という定義があります。その山村は国土面積の 5 割・1,785 万 ha (47.2%)、森林面積の 6 割・1,538 万 ha (61.2%)、全人口に占める割合・435 万人 (3.4%) という実態です。山村は①国土の保全、②水資源の涵養、③自然環境に恵まれた余暇空間の提供など、国民生活の安定・向上に重要な役割を果たしています。国土面積の 5 割の山村を、わずか 3% の人で守る

のは無理なことで、国をあげて取り組まないと山村は崩壊する可能性があります。

山村が抱える課題として、①農林業の衰退、就職機会の減少、②耕作放棄地の拡大、不在村者の保有林（私有林の24%）、③過疎化と少子高齢化、④進む獣害などが指摘されております。

そのような山村の現状から、山村再生の役割と可能性を探ってみます。森林は国民の共通財産ともいえます。食料、水、木材、エネルギーを供給し、逆にCO₂を吸収するなどの効用があります。つまり、森林は国民の安全保障の役割を担っているのです。その森林が、新たなエネルギー・マテリアルを供給し、グリーンライフ・健康ライフなどの新たなライフスタイルを提供します。ここに、環境、教育、健康などによる新たな可能性と、企業・都市との連携による参加型社会の広がりが期待できます。

森林資源の活用によるCO₂排出削減、木質バイオマスの安定供給、新素材・エネルギーの事業化、教育・健康ビジネスなど、21世紀型の新たな価値・ビジネスを創造することが可能になります。大企業にはCO₂削減の義務がありますが、義務のない中小企業や自治体などがCO₂を削減する設備を設置・導入し、その削減されたCO₂を大企業が排出権として買い取る制度として、国内クレジットがあります。

また、自らのCO₂排出量のうち、どうしても削減できない量の全部または一部を他の場所での削減・吸収量でオフセット（埋め合わせ）することを、カーボン・オフセットといいます。このカーボン・オフセットを推進するためのオフセット・クレジット（J-VÉR）制度があります。

高知県林業振興環境部では、このオフセット・クレジットに取り組んでいます。高知県が森林の間伐・枝打ち等の手入れをし、それらを活かした木質バイオマスによる新エネルギーを生み出していますが、そのCO₂排出量削減を住友大阪セメントをはじめとする企業にオフセット・クレジットとして販売しているのです。

他に、百貨店やホテルをはじめ多くの企業とオ

フセット・クレジットしています。削減義務のないこれらの企業は、CO₂削減に貢献しているという企業イメージのアップを図って業績を伸ばそうとする戦略をもっているのです。高知県は、CO₂排出量削減1トンあたり、10,500円で販売しています。つまり、森林の手入れ、山村の再生を、都会の企業の資金を活用して行っているのです。

企業とのマッチングをはじめ手続きの全てを、国の外郭団体である山村再生支援センターが担ってくれ、認証に係わる全ての費用を経済産業省が補助する仕組みができています。これらを活用して、すでに全国で234件申請されています。

こうした先進地に見習い、朝来市も一刻も早くバイオマスタウン構想を策定し、国の有利な補助を活用して森林の手入れや木質バイオマスエネルギーなどに取り組み、その上で縁のある三菱や県内の川鉄・神鋼といった鉄鋼メーカーなどとオフセット・クレジットに取り組むべきです。私は朝来市議会において、これらの提案を継続して行っていますが、この度の3月定例議会において新年度予算案の中で、ようやくバイオマスタウン構想策定にむけた予算が林業総務費として50万円計上されました。調査費の第一歩といえる予算です。バイオマスタウン構想にもとづき、黒川地区内にある生野財産区の森林を手入れし、木質バイオマスエネルギーを確立する。それらの費用はオフセット・クレジットによって企業から資金調達することができ、しかも企業がPRすることにより黒川地区のブランドが上がります。そして、グリーンライフ、健康ライフとして企業や都市住民が黒川地区を訪れるように結び付けていく必要があります。山村再生という大きな目標をもって、取り組んでいきたいものです。

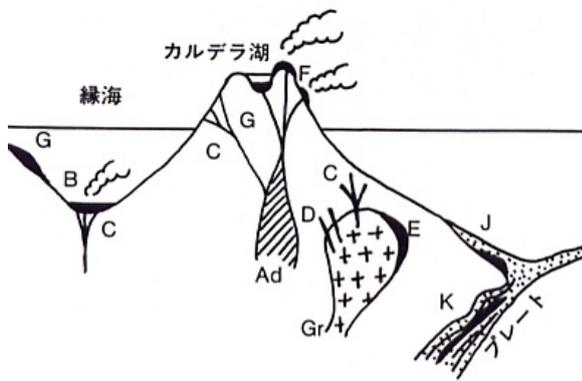


生野鉱山だってジオパーク！？

研究員 宮崎隆史

日本ハンザキ研究所のある生野の大切な魅力資源である生野鉱山について、今回は「自然・地質」という観点からご紹介したいと思います。

今から1億年ほど前、日本では激しい火山活動がおこっており、生野鉱山はこの頃に噴出した火山噴出物によってできた地層から形成されています。地下深くにしみこんだ雨水や海水がマグマの



金属鉱床形成の模式図 (出典:「日本の鉱山文化」1996)

熱で加熱され、石英を中心とした金・銀を含む熱水となって安山岩などの地層群を貫き、断層や岩石の割れ目に沈殿することによって金や銀などの鉱脈が形成されました (模式図のC)。

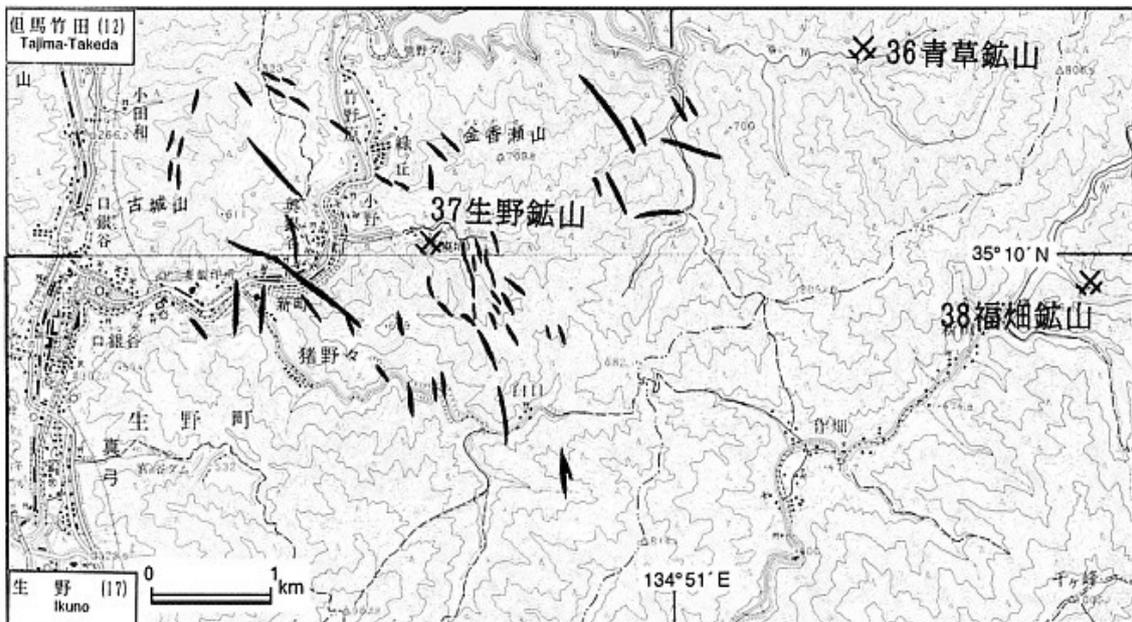
生野鉱山は、熱水が岩石中の割れ目に入ることによって鉱石鉱物が沈殿した「多金属熱水鉱脈鉱床」の代表であり、佐渡や石見、足尾、多田など江戸時代から近代まで盛んに採掘されていた鉱山はほとんどこのタイプです。

白亜紀生野層下部・中部に位置付けられ、流紋岩及び同質凝灰岩、安山岩、玄武岩などがみられます。鉱床の分布は、西から東に太盛(たせい)鉱脈群、金香瀬(かながせ)鉱脈群、青草(あおくさ)鉱脈群の3群に分かれ、生野層群として位置付けられています。鉱脈は、旧生野鉱山事務所付近を中心とする東西約5km、南北約4kmの範囲に展開し、金香瀬の“千珠本ひ”は平均脈幅0.8m、走向延長1,550m、傾斜延長990mに達しました。閉山までに採掘された鉱脈は、70条以上に上ります。

鉱石鉱物として、金、銀、鉛、亜鉛、黄銅鉱、閃亜鉛鉱、方鉛鉱、錫など非常に多くの種類の鉱物を産出しています。

熱水鉱脈鉱床で見られる重金属は、大部分が硫化物として沈殿しており、日本において大規模なものは酸性ないし中性火成岩、それらの凝灰質岩、或いはそれらの近くにある砕屑岩中に発達して、金、銀、銅、鉛、亜鉛、錫、タングステンなどの供給源となっています。

生野層は、生野鉱山を中心に広く分布する地層

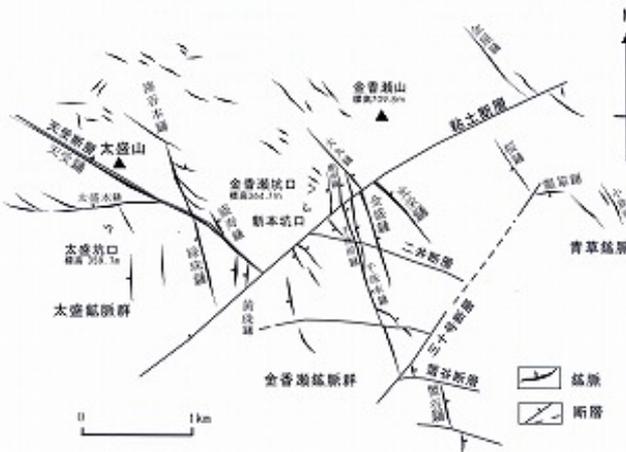


生野鉱山の鉱脈位置図 (出典:「兵庫県下の鉱物資源」中村威・先山徹 1985)

で、他の地層に比べて岩相変化に富むことがあげられており、層厚は地表部では最大 1,500m以上に及ぶ可能性があります。

金香瀬坑口の東方 300m 付近には、有名な掘り切り“慶寿ひ”の採掘跡があります。今から約 450 年前の天正期に、鉍脈露頭から下部の脈に沿って鉍脈が深く掘り抜かれた結果、母岩の流紋岩質火砕岩のほぼ垂直な大きな壁が残されました。

生野鉍山では、地上から地下に向かって金・銀帯、鉛・亜鉛帯、亜鉛帯、銅・亜鉛帯、銅帯、錫・タングステン帯と帯状に分布していることから、中近世には金・銀山として栄え、明治以降になると銅・亜鉛・鉛・錫が主体の鉍山となりました。



生野鉍山の鉍脈と断層図

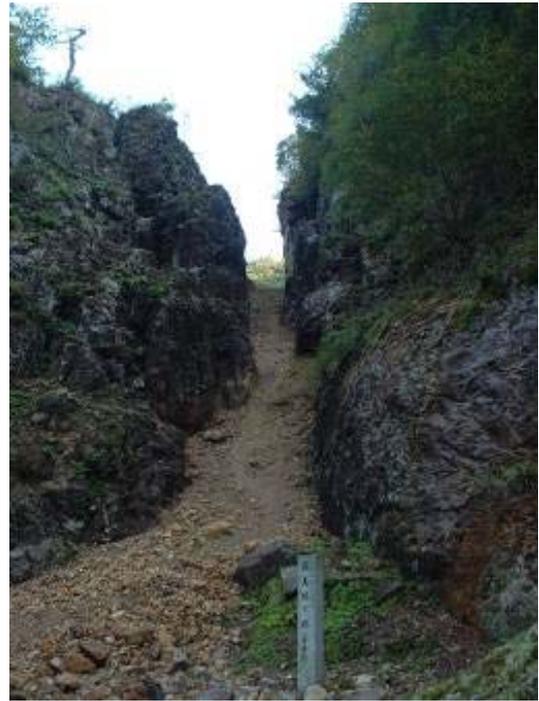
(出典:「生野地域の地質」地質調査総合センター2007)

昭和 48 年 (1973) の閉山までに掘り進められた坑道の総延長は 350 km以上に及び、粗鉍生産量は推定 1,200 万 tにのぼるといわれています。

三菱金属工業株式会社の生産統計によれば、昭和 31 年 (1956) ~48 年 (1973) の 17 年間には、平均品位 Cu(銅)-1.19%、Pb(鉛)-0.43%、Zn(亜鉛)-2.06%、Sn(錫)-0.16%の粗鉍が 3,803,000t 生産されました。

鉍石鉱物として、黄銅鉍、閃亜鉛鉍、方鉛鉍、錫石、鉄重石を主とし、斑銅鉍、黄錫鉍、灰重石、エレクトラムなどを伴う鉍石で、ほかにコバルト、インジウムを含む鉍物を産したほか、生野鉍山を原産地とする世界新産鉍物「生野鉍」と「櫻井鉍」を産出し、鉍物種 35 種類が確認されています。

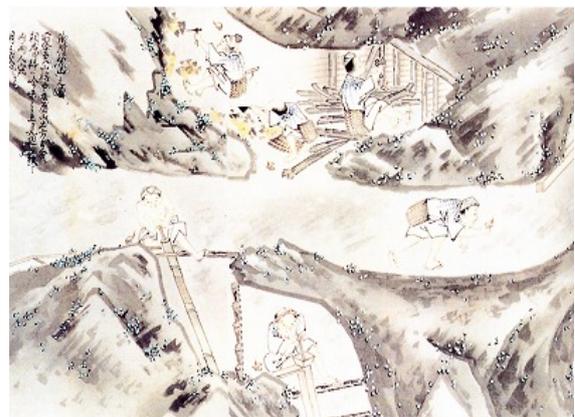
このほか、「史跡生野銀山」内の生野鉍物館には、



慶寿ひ (掘り切り)

明治時代に生野鉍山局長も務めた和田維四郎の鉍石コレクションや木内石亭の日本最古の鉍物標本、三菱ミネラルコレクションなど、貴重な鉍石標本が数多く集められています。

蛇足ですが、生野高原に多く分布する生野石は、庭園用の石材としても評価が高く多くの庭園など



「但州生野銀山絵巻」 生野書院所蔵

で使用されています。

以上のように、生野鉍山は地質的な特性を持つ立派なジオパークのひとつであり、私たちはこうした個性や特徴をあらためて理解するとともに、全国に向けて積極的に情報発信していく必要があるでしょう。

(朝来市教育委員会社会教育課)

特集 (オオサンショウウオ保護保全に携って)

栃本理事長の意志を継ぐ可能性のある研究者、技術者には、いろいろな方がおられると思います。NPO 法人日本ハンザキ研究所は、オオサンショウウオの保護保全に特化し、オオサンショウウオの調査・研究及び技術開発等の専門機関として、オオサンショウウオとそれを取り巻く自然環境の保護・保全をも目指した活動をNPO法人組織として続けていこうとスタートしたばかりです。

環境学習イベントやこのような広報誌の発行等も当NPO法人の活動ではありますが、本来の調査研究や技術開発の妨げにならないようにと配慮しているのですが、どうしても理事長や専門の方に頼らざるを得ない状況となってしまう、いつも恐縮しております。

栃本理事長の36年間という気の遠くなりそうな地道な継続に対して、全国的に沢山とは言えないまでも、若い研究者や技術者はおられると思いますが、先生の意志を引き継いでやっていくことのできる方は果たしてどのくらいおられるのでしょうか。

今回は、先生との交流のある三人の研究者、技術者（当法人の会員）の方に、「オオサンショウウオの保護保全に携わって」というテーマで、執筆をお願いしました。それぞれに、大変興味ある原稿をお送りいただいたことに対して、感謝いたします。

ただ、もっと沢山の方をお願いしたかったのですが、年度末の忙しいこの時期に、仕事の合間をぬって、なかなか調整できない方もおられて、残念な限りです。

今後、改めてお願いしたいと思います。

最後に再度お礼申し上げます。

事務局 編集委員

はんざき調査事始め

研究員 岡田 純

私がオオサンショウウオ（以下、ハンザキとする）の調査をするようになったのは、両生類学者の故宇都宮妙子先生の調査を手伝ったことがきっかけである。宇都宮先生は、南西諸島の両生類研究の草分け的存在で、晩年は、小型サンショウウオ、ダルマガエル、ハンザキの生活史や保全に関する研究、地元広島県の両生類相の解明に尽力された。私は高校1年の時に偶然見たブチサンショウウオに衝撃を受けて両生類の野外調査を始めた。その後、宇都宮先生の小型サンショウウオやダルマガエルなどの調査に付いてまわり、両生類の野外調査のいろはを学んだ。その宇都宮先生が最後に取り組みされたのは、ハンザキの研究である。宇都宮先生から学んだことは数限りないが、ハンザ

キ研究を一緒に行った中で「これは大事」と思ったことをいくつか紹介したい。



巣穴から出て来たオオサンショウウオの幼生を撮影する宇都宮妙子先生

「幼生が大事」

ある時宇都宮先生が、広島県北部の高野町（現在庄原市高野町）で両生類相の調査をすることになった。高野町はハンザキの産地として有名で、かつて安佐動物公園の研究チームが調査を行ったことでも知られている。宇都宮先生はまず、地域住民から聞き取り調査を行い、生息情報の多い場所で生息調査を行うことにした。我々も加わり、実際に生息調査をしてみると集落を流れる小川にハンザキが普通に見られ驚いた。しかし、どれも全長 50-60cm を優に超える成体ばかりで、幼生や幼体がちっとも見つからなかった。宇都宮先生から「両生類を調査する時にオタマ（幼生）をバカにしちゃいけない、幼生は繁殖の証拠を示す大事なもので、寿命の長いハンザキの場合、特に幼生や幼体の存在に注目せんといけんよ」と何度も言われた。小型サンショウウオやカエルの場合、幼生は簡単に見つかるのが普通で、ハンザキの幼生が滅多に見つからないのは奇異に感じられた。ちょうどその時期、もうひとつの調査地となった旧君田村（現在、三次市君田町）の河川で、約 1 才から変態期のハンザキ幼生が複数見つかった。もし、川によって成体がいても繁殖できていない、または、繁殖しても幼生が育っていない状況に陥っているなら大きな問題である。幼生の発見に感激した我々は、なぜ幼生が見つかる川とそうでない川



オオサンショウウオの幼体の頭部。ユーモラスな顔が可愛い

があるのか、生息環境についてさらに調査が必要だと思い、上記 2 河川に行く機会が増え、次第にハンザキの研究にのめり込んでいった。

「調査地に親戚を作ること」

もうひとつ、宇都宮先生と調査をする中で学んだことは、「調査地に親戚を作ること」であった。言い換えれば、調査地で住民に嫌われてしまっはいい調査ができないということである。ハンザキは人里離れた河川の上流域にも生息するが、集落付近にも多く生息していて、生息情報を得たり、夜間調査を行うためにも住民の理解と協力が必要である。また、調査地で仲良くなった「親戚」とハンザキ談義に花を咲かすのも楽しみのひとつである。ハンザキの生息地に住む方たちは、ハンザキのことをよく知っていて、いろんな話を聞かせてくれる。例えば、子牛が川を流れてきたと思ったら大きなハンザキだったとか（昔話）、今もあの淵には 1.5 m の大ハンザキがいるとか（マジらしい）、昔、夜川で取ったハンザキを持って帰る途中で袋からハンザキが出てきたので「出た！」と思ったらお化けが出たと思って皆が走って逃げ帰ったなど（実話）、枚挙にいとまがない。生態研究とは違うが、ハンザキの昔話、狩猟法や調理法などは、地域に残る貴重な文化であり、何らかの形で記録し、残しておきたいと思う。

上記のようにハンザキ調査を通じて学んだことは、私の大きな財産となり、新天地である鳥取県でのハンザキ調査に大いに活かされている。思うような結果の出にくいハンザキ研究ではあるが、ハンザキのように気長にのんびりと研究を続けていきたい。

（鳥取大学地域学部地域環境学科）



オオサンショウウオ ねえ・・・。

研究員(理事) 中島 悟

はて、オオサンショウウオにまつわる思い出ねえ。なるほど、今は一年中、オオサンショウウオに多かれ少なかれ仕事をさせてもらっている。仕事柄、河川工事で何か困ったことがあると、思い出したように電話がかかってくる。

「巣穴の設計をしたのですが、図を見て何か意見ください。」

「オオサンショウウオはこんな奴だから、川のあっち側より、こっち側にこれぐらいの柵を入れたほうがいいねえ。出入り口は大きいとイヤがるから、こんくらいにしておいて、云々・・・。」

などと小学生の受け答えのようなことを、さも専門家ぶりにお答えする。相手はというと、

「・・・」

アシカが笑っているような、くしゃみでもするような何とも言われぬ、微妙にひきつった顔をしていらっしやる。

「いえ、いえ、そうじゃなくて、図面にするのだから数字で教えてよ。」

「はい、はい、わかりました。それじゃあ、この大きさは15cmぐらいにしてヨ。」

てな具合に。(一応、根拠は付けますよ、ハイ。)

そして、最後に一言、弁解がましく、「川は生きものですから。」と逃げ口上で締めくくる。

母の実家が鳥取県の関金町の農村にあり、小児喘息持ちであった私は、夏休みになると長期療養として一人関金へ送り込まれた。当時、日本は高度経済成長期のまっただ中ではあったが、田舎にそんなもの関係あろうはずがない。朝はかぶと虫か鬼虫(クワガタ虫のこと)採り、川で泳いだ後は蚊帳の中で昼寝をして、起きたら清水で冷やした西瓜を食う。たまに牛の餌やりして畑の手伝い。そして早めの晩飯の後は寝るだけ。穴を開けた一斗缶に入れたかぶと虫の

「ガサガサ・・・」

を聞きながら寝入っていく。

野山を相手に一事が万事スローな生活を送っていた。その中でも異彩を放っていたのがオオサンショウウオである。

中国山地の中央部に位置する関金町は、オオサンショウウオのメッカと言ってもいいくらい多産する。オオサンショウウオとの出会いはこの時からである。

田んぼの水路の柵に、よくオオサンショウウオが落ちていた(少し深く這い上がれそうもないので)。それを祖父が拾いあげ、古い大きな水瓶に入れていたのを覚えている。

「手を出すと、指がなくなるゾ。」

この時から、‘オオサンショウウオ=得体の知れない恐怖の生きもの’が私に刷り込まれた。さらに輪をかけたのが、床板がぎしぎしと鳴る古い博物館の水槽にいた大きなオオサンショウウオである。館内は薄暗く、広間の中央にコンクリートの大きな水槽があった。金網越しに上から覗き込むようになっていたと記憶する。暗い水槽の奥底に、姿形はよくわからないがとても大きなオオサンショウウオが動きもせず、じっとしていた。怖いもの見たさに覗き込む子供心を、ゆらゆらとたゆむ黒い水面が一層の恐怖をもって弄ぶ。

その後、オオサンショウウオとは遠ざかるが、同じ仲間のイモリや小さなサンショウウオとは妙な縁があった。

行動範囲も広がった五、六年生の頃、近所の悪ガキどもと自転車をコギコギ、イモリ捕りに出かけた。10リットルのバケツいっぱい捕ったのが記録である。今でこそ貴重種の仲間入りしようかというイモリであるが、当時はどこにでもいた(私の住んでいたところの話ですけれど)。何のために捕るかって?野暮なことです。ただ捕りたいから捕る。狩猟本能です。理由はありません。

中学、高校では野の人とはならず、無為のまま過ごしたが、大学の卒論テーマでイモリとクロサンショウウオを題材とすることになった。たまたまである。同期の友人が、僕は魚、私はカエル、と望んだため残るサンショウウオを私が選ぶことになった。多数のイモリが研究の材に供され、無

事立派な？卒業論文となった。

そして大学卒業と同時に水族館に入った。ここではオオサンショウウオはおろか、両生類とも全く縁がなかったが、ある日、オオサンショウウオが死んだから解剖を手伝え、と声がかかった。おまえは、大学でサンショウウオを切り刻んでいたからわかるだろうとのことらしい。水族館では、動物が死ぬと解剖して死因を究明する。オオサンショウウオも然りである。大学での研究が結構役に立った。

「これが膵臓で、こっちが脾臓。この肝臓の横にあるグリーンが胆嚢。そして、このきれいな黄金色が脂肪体。云々。」

「ほほお、なかなかやるなおまえ。」

大きさは違えども、臓器の配置、色に大差はない。ただし、この時の死因はよくわからなかった。いつも暗い水の中にいた恐怖の生きものを解剖する日が来ようとは、……。このことが契機となり、動物園や水族館に行くと必ずオオサンショウウオを気にかけて見るようになった。私の記憶にあるオオサンショウウオの暗いイメージはそこには無く、溪流の水中を模しきれいにレイアウトされた水槽の中に鎮座する威風堂々の姿を目にする。

水族館を辞し、環境調査を行う職種に就いてからおおよそ 20 年、オオサンショウウオと本格的につきあい始めた。今の仕事に就いて初めての調査が、工事が行われる川からオオサンショウウオを保護することであった。

またまたここでも、大学でサンショウウオを扱っていたからできるだろうとのことだった。はてさて、どうしたものか。ましてや、工事が終わるまで飼うですと。どこにもそんな事例はなかった。一からの挑戦である。試行錯誤、しかし失敗は許されません。特別天然記念物ですから。

当時、姫路市立水族館へおられた栃本館長へ教えを請いに伺う。

「先生、どうしたらいいんでしょうか」

「工事による保護なんて私も初めての経験です。何とか頑張りましょう。」

現在、各地で行われているオオサンショウウオの保護対策の礎となる事業の始まりである。

昼夜逆転したおおよそ 2 週間に及ぶ保護捕獲の末、230 余りのオオサンショウウオが保護され、3 年半に及ぶ飼育後、工事が終わった河川へと戻された。成功も失敗もその後の糧となり、今ではより高度な調査へと進化している。

私はというと、近頃は川に出てオオサンショウウオを探すということが滅多になくなった。過去の経験を基に、机上で、ああだ、こうだと言っているだけだ。いかん、いかん。ただの評論家ではないか。答えは現場に落ちている。20 年前に比べ 15kg のダンベルを身にまもってはいるが、もう一度川へ戻ろう。

昨年、5 年ぶりにこの川を訪れた。この間、幾度かの大きな出水を経験し、その姿は変わっていた。ここでは、人工巣穴などオオサンショウウオの生息を支えるための構造物が数多く作られている。当時、これらを評価し良い構造物、改良が必要な構造物と分けた。しかしである。変わっていた。見事に変わっていた。何をどう評価したのか。そのままのものもあるが、良かったものが悪くなっていたり、その逆もある。

「川は生きものですから……。」



不気味さも漂う？



絵・なかしま

(環境関連会社 環境計画部 副部長)



オオサンショウウオとの運命的な出会い

研究員 田口勇輝

オオサンショウウオの調査・研究に携わる者の「オオサンショウウオにかける思い」「過去の思い出」などが、今回の一つのテーマということで、自分の人生を決定づけた“オオサンショウウオとの運命的な出会い”について小文を書かせていただきます。

まず、オオサンショウウオ（以下、アンコウ）との出会いが、完全に私の人生設計を狂わせてしまったと言っても過言ではないでしょう。大学の学部4年間を卒業したら公務員になって平凡でも安定してそれなりに楽しい人生を送る、私はそんな（今となっては面白くも何ともない）人生設計を立てていました。しかし、アンコウの魅力に取り憑かれ、結局、大学にほぼ10年（学部4年+修士2年+博士3.5年）残ることに。この先に待ち受けるものは……。

私は小さいときから自然（特に、動物）が大好きだったのですが、大阪府堺市にある実家の周囲に残された自然といえば、団地の中に残る草原くらいでした。小学生のころ、そこでカマキリや、その餌にするバッタやコオロギを捕まえるのが、関の山だったのです。高校生のとき、一番関心がある自然（＝環境？）のことを学びたいと考え、大阪府立大学農学部 地域環境科学科（現：生命環境科学部 緑地環境科学科）に進学したものの、生態学など生物の授業はほとんどなく、吹奏楽部に将棋部にと部活三昧の毎日を送りました。が、やっと学部4年生になり緑地環境保全学研究室に配属され、自分のやりたい動物の調査を行えることになったのです。そこで始めたのが、アンコウ……、ではなく、丘陵地のため池に生息する水生昆虫（トンボ、ミズカマキリ、ゲンゴロウ etc.）と外来生物アメリカザリガニの関係を調べる研究でした。何とか卒業論文をまとめ、指導教官の夏原由博先生のところへ挨拶に行くと、「田口くん、あさってヒマ？」というお言葉が。「オオサンショウウオの調査に行かない？」。これが、アンコウと

の運命的な？出会いでした。初めは色々と躊躇したものの、なかなか出来なさそうな研究対象ですし、軽い気持ちで引き受けることにしました。アンコウを研究するようになった切っ掛けは、本当に“たまたま”、突然にやってきたのです。

アンコウの研究を始めることになり、夏原先生に紹介していただいたのが、当時、姫路市立水族館館長をされていた日本ハンザキ研究所 所長の栃本武良先生でした。そして、栃本先生から「オオサンショウウオの研究をしたいなら、すごい人がいるよ」ということで紹介していただいたのが社団法人 兵庫県自然保護協会 理事の大沼弘一さんだったのです。

大沼さんに初めてアンコウの調査へ誘っていただいたときは、胴長（川や池の中へ入るため、）胸まで続いている長靴）の存在も知らず、普通の長靴を持っていきました。もちろん、そんな靴で川のなかにはほとんど入ることができず、川沿いの藪の中を枯れ草とクモの巣まみれになりながら必死の思いで付いていったことを、昨日のこのように思い出します。それは、ちょうど私の23歳の誕生日でした。

大沼さんは動物・植物ともに何でもご存知で、まさに凄い！の一言。私は修士課程の2年間、大沼さんの調査や観察会にたくさん同行させていただき、水を得た魚のように色々なフィールドで自然を体感させていただきました。アンコウの調査に同行させていただき3ヶ月が過ぎ、6日連続のアンコウ調査のお仕事を手伝わさせていただいたのですが、初日に事件が起きました。捕獲して計測



調査を始めて3ヶ月で早速アンコウに咬まれたところ。犯人と共に記念撮影（2005/7/25）。

中のアンコウが逃げようとしてとっさに押さえた手が、ちょうどアンコウの口元に行ってしまったのです。次の瞬間、私の右手薬指は、全長 50cm ほどあるアンコウが開いた口の中に入っていました。シマッタ！と思い、手を引いたが逆効果、私の薬指をくわえたままアンコウは数m飛んでいき、それとともに指から勢いよく血が流れ出しました。上あごの2列目にある鋭い歯が薬指の手の平側に深い傷口を2つ、下あごにある細かい歯が手の甲側へ無数の浅い傷をたくさん刻み込んだのです。救いを求めるように目を向けた先の大沼さんは、私の傷よりもアンコウを逃がすまいと追いかけて行かれたのでした……(笑)。あとで、「みんな1回はアンコウに咬まれるけど、ちょっとペース速いで」と言ってもらえたのが、なぜか、少し認めてもらえたような気がして嬉しかったことを今でも鮮明に覚えています。

大沼さんと共に、同保護協会の川上徳子さんにも沢山世話になりました。街中で甘やかされて育ち、何も自分で出来ない私に、川上さんは、破れた胴長やタモ網を修理してくださったり、思い返せば恥ずかしくなるほど色々親切にしてくださいました。大沼さんと川上さんは、アンコウの調査をするときも息がぴったりで、自分の理想的な将来像でもあります。リーダーの大沼さんが時々されるケアレスミスに、鋭い突っ込みを入れる川上さん。アンコウの生態や調査方法のノウハウ、多くの生きものたちのことを、どれだけ、このお二人から学ばせていただいたことでしょうか。

(失礼を承知の上ですが、)大沼さんは第二の父親、川上さんは第二の母親といった感じで、感謝の気持ちでいっぱいです(申し訳ございません。本当にありがとうございました)。私が博士課程に進もうと思ったのは、アンコウのことをもっと知りたいという気持ちもありましたが、お二人から、もっとたくさん自然のことを学ばせていただきたいという気持ちが正直つよかったからと言わざるを得ません。

さて。軌道を修正します。今となってはアンコウのおかげで、毎日が実に楽しく幸運にも恵まれ

ているように思います。多くの人が、小さいときのほうが楽しかったと言われますが、私は、大きくなってからのほうが絶対に楽しい毎日を送っていると思います。それも、アンコウとの出会いがあったからでしょう。この運を活かしながら、一生アンコウに携わり、世界の人々へアンコウの魅力を伝えていきたい、アンコウの棲む自然を保全していきたい、と強く考えています。

アンコウの調査を始めることとなってから、もうすぐ7年目を迎えようとしています。いろいろと分かってくるが増える一方、それ以上に分からないことも増えてきました。私が修士課程のときに調べた、アンコウの季節的な移動を見ると、多くの個体が繁殖期前に遡上するなかで、下流へ移動する個体や、ほとんど移動しない個体も少なくありませんでした。なんて、捉えがたい、まとまりのない(多様性のある?)動物なのでしょう。一般的に、アンコウは3000万年間ほとんど姿を変えていないと言われます。なぜ、様々な生物が形態や棲み場所を変え進化してきたなかで、アンコウはこれほど長い間、同じ姿を保ってきたのか。それは、きっと彼らがとても完成された、理にかなった動物だからだと、私は考えています。そのまとまりの無さは大きな環境変動をも包含しうる柔軟性をもっていて、多くの個体が一時的に滅びてしまっても、どこかで生き残っていた個体がまた種族を復活させる、そんな寛容なパワーをアンコウは秘めているのでは、と妄想してしまいます。アンコウとの運命的な出会いを活かし、この不思議で魅力あふれるアンコウにずっと携われる生活を送れたらどんなに幸せだろうかと心から思います。



待ち伏せ型の“狩り”をするアンコウ。獲物を狙う目というより、のん気な顔に見えるのは私だけ??
(京都大学大学院)

文・え 長谷 愛子

ハンザキとのであい



2009年、3月某日、私は初めてハンザキ研を訪れました。

私は自然大好き、生き物(とくに鳥...)大好き人間です。

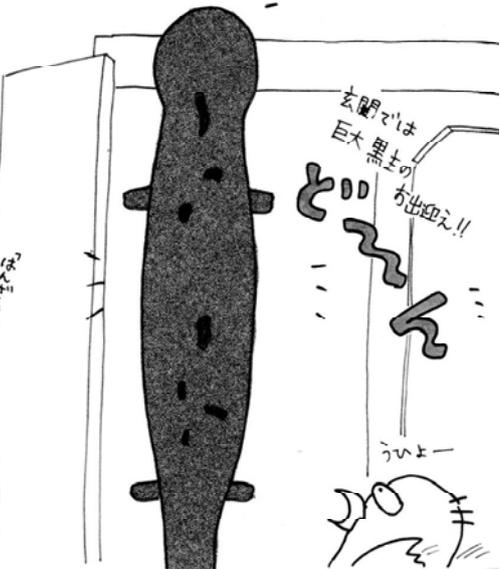
とらや
ええ鳥
おらんかいのー



ツミは、イラスト、音楽、鳥見。今回は和4にて未知の生物

「オオサンショウウオ」に出会うべく、ハンザキ研にお邪魔させていたたくことに...

迎えて下さったのは、ハンザキ研 所長の 橋本先生!! (噂では 仙人のおうな方と云く)



連載 (オオサンショウウオの古名と地方名)**5、『江戸後期諸国産物帳集成』にみる
石見、安芸のオオサンショウウオ**

研究員 池上優一

はじめに

オオサンショウウオの古名や地方名を探る手段の一つとして、地方の古書などの記録に残っている名前を調べる方法があります。そのような資料で、一般にはお目にかかれないものは別として、記録として公にされているものは閲覧可能です。ここでは、「江戸後期諸国産物帳集成 第XI巻 因幡・石見・備前・備後・安芸」〔諸国産物帳集成 第II期〕という資料を取り上げ、この中に出ている記載を探してみました。

この産物帳集成は、多くの郷土誌などで構成されているのですが、サンショウウオ（現代でのサンショウウオ科、オオサンショウウオ科の両方を包含している）に関する記載があり、それらを順に取り上げていきたいと思えます。

1、具体的な記載を見る**○「石見八重葎(ヤエムグラ)」より**

まず、1816年に石田春律（石見国〔島根県西部〕那珂郡太田村〔現浜田市〕在住の郷土史家）が編集した同地方の地誌で、村別に産物が記載されている「石見八重葎(やえむぐら)」があります。その中には、『市木村〔現在の邑南町及び浜田市に亘る区域〕産物 山椒魚』(記載①)とあるだけで、特に解説等はありません。

○「石見外記」より

次に、1820年に石見浜田藩の儒官、中川顕允によって編集された石見の国の地誌で、各郡の記述の中に物産について簡単な記載のある「石見外記」の中でサンショウウオ関連記載をみます。『鯢(ハンザケ) 一名山椒魚 ハンザケとは邑智郡あたりの方言なり その性さんせうを好み 邑智郡都賀〔邑智郡美郷町都賀一邑南町、川本町に近い江の川沿い〕 辺にては 大小の二品ありて 大なるは長さ三尺余 その齒堅利にして或いは溪流を渡る人あればらいつくことあり 人とらえて食うものあり その味甚だあし 是史記始皇本紀に人魚の膏(あぶら)と見えしは此魚の油なるべ

し 本草に鯢魚一名王鮪(わうい) 山溪中に在り 鮎(なまづ)に似て 四脚(あし)有り 長尾あり亦声が小児の啼が如し 故に鯢魚と云う 一名は人魚 膏燃(たけ)ば燭(ともしび)に滅(きへ) ずと見え 考へ知るべし』(記載②)

○「芸備通史」より

1825年に頼惟柔等による「芸備通史」〔全159巻の大著で、巻四に藩を通した物産を記載し、以下各府・郡の内にも物産の記載〕があります。なお、頼惟柔(杏坪)は広島藩士であり漢学者で多くの著書を残しているそうです。

『鯢魚(さんせういを) 吉和村〔現廿日市市〕 近辺 谷川に生まれ 形は蜥蜴(いもり)のごとく 四足ありて 木にも上るなり 水の北流する川筋に居る 又一種大なるは長さ二尺ばかりもありて 四足あり 山にも上る 夜は水に逆ひ大口を張て 何にても流れ来るものを呑む 是をはんざけの“ようまち”という』(記載③)

続いて、産物連記の中から該当部分のみを抜粋します。

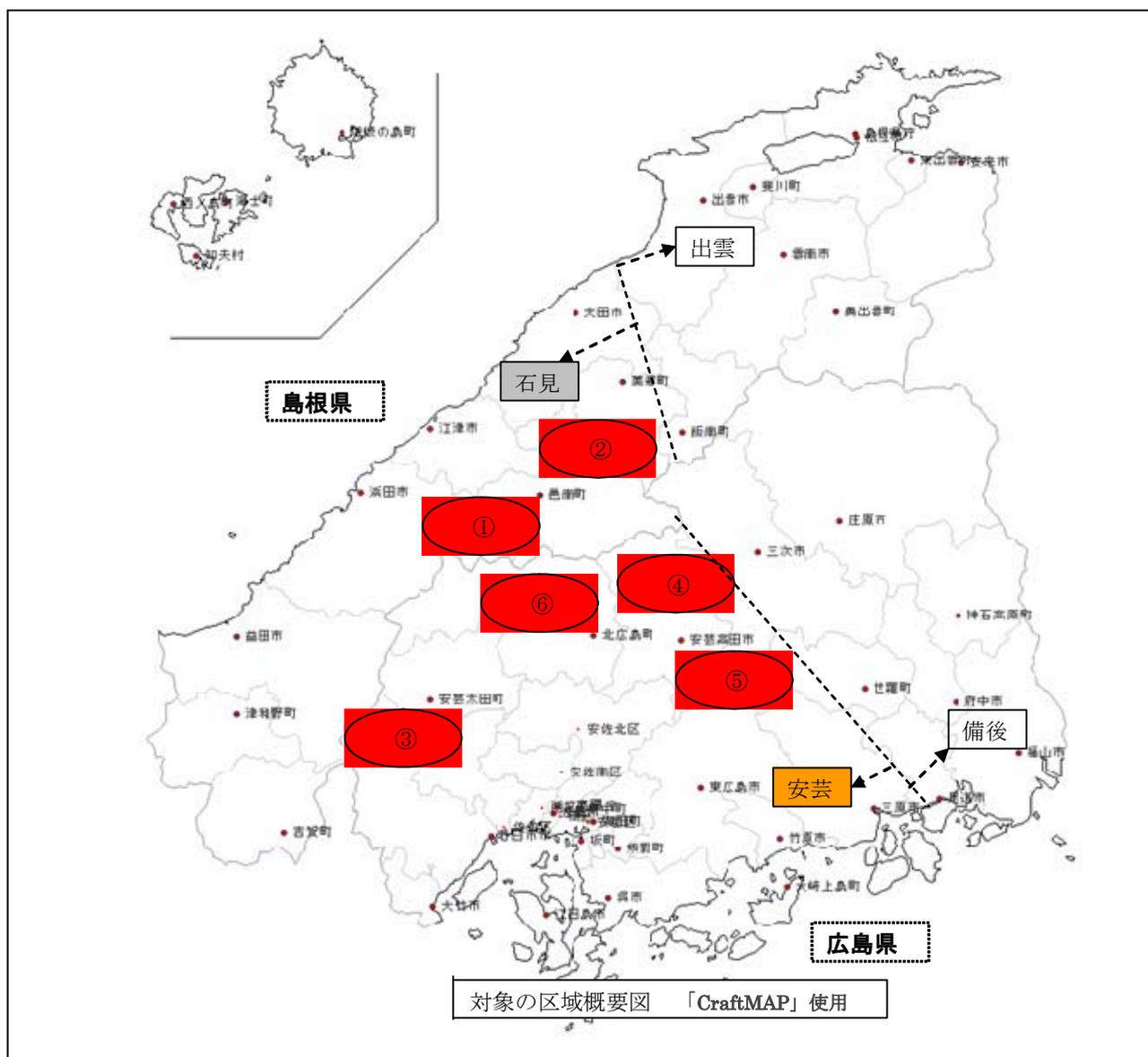
『鯢魚(さんせういを) 土師入江村〔現安芸高田市〕等の大川に住む 長三尺ばかりなるも まれにあり』(記載④)

『鯢魚(さんせういを) 志和堀村 内村〔志和町 現東広島市〕にあり』(記載⑤)

『鯢魚(さんせういを) 中野村〔現北広島町中野村〕深谷水に出る』(記載⑥)

2、記載内容を整理してみる

別添の図に石見国と安芸国を示し、上記の資料の記載①～⑥の該当区域を少し大きめに示してみました。第2回自然環境保護基礎調査の動植物分布図のオオサンショウウオ確認地点と対比した結果、いずれの区域も確認該当地点と思われれます。さらに、サンショウウオ科の分布では、これらの地域は、ハコネ、ヒダ、カスミ、ブチサンショウウオら4種の生息域でもあります。なお、以下紛らわしさを避けるために、「大型のサンショウウオ」あるいは「オオサンショウウオ」、「サンショウウオ科」、「小型のサンショウウオ」、両方を言う場合は「サンショウウオ」と区別します。



記載①の邑南町から浜田市に亘る区域における「山椒魚」ですが、ここではオオサンショウウオかサンショウウオ科のものかは判別できません。しかし、記載②の邑南町から川本町にかけた江の川沿いの区域についての記載によって判明してきます。鮠という一文字でいきなり（ハンザケ）と読み、そして一名山椒魚と出てきます。ハンザケは邑智郡辺りの方言であるとしています。そして、大小の二品があることを示し、「大なるは長さ三尺余（90cm 以上）、その歯は堅く鋭く、溪流を渡る人に食いつくことがある。これを捕らえて食う人もあるが、その味は甚だ不味い。」とっており、この部分は明らかにオオサンショウウオのことを

述べています。続けて、「これは、『史記』の「秦始皇本紀」に“人魚の膏（あぶら）”と出ているのは此魚の油である。本草（本草綱目）に鮠魚は一名王鮪（おうい）と言い……」の部分は、1600年頃の中国の明代の本草学者である李時珍の「本草綱目」の引用であり、言及は別の機会にしますが、我が国の江戸時代の本草学及び博物学の黄金期の礎となっています。

広島県側の廿日市市付近の地域についての記載③では、少し複雑になります。鮠魚をサンセウイヲと読ませ、イモリに似て木にも上ると、サンショウウオ科のものを言っています。そして、又一種大なるものは……と続けて、ここで始めてオオサンショウウオのことを言っています。「長さ

60cm ばかりで、四足があり、山にも上る。夜は水に逆って大口を開けて、何でも流れ来るものを呑む。これを“はんざけのようまち”という。」とあります。栃本理事長の話では、「夜間のオオサンショウウオは、大きな石の側の魚の通り道で待機して、遡ってくる魚類等を一呑みにすることが多い」と多くの観察結果から述べられていました。いずれにせよ、何もしないで長時間じっと待っている様子を言っているものではないか?と思います(ご存知の方教えてください)。

記載④は、安芸高田市辺りですが、サンショウウオ科とオオサンショウウオ科の両方のものについて述べ、長さ 90cm のものも希にいます。そして、記載⑤、記載⑥ともやはり同様に、サンショウウオ科とオオサンショウウオ科の両方のものを総称して、鯢魚(さんせうい)と言っているものと思われます。

『諸国産物帳』について

1693年に金沢城主前田綱紀に召されて、中国の本草書・辞書類・歴史書・地誌他の諸記述を事項毎に再編成した「庶物類纂」の編集を進めていた稲生若水は目標であった1000巻うち、362巻のところで病死した。八代将軍吉宗の要請により、1919年前田綱紀は362巻を献上し、幕府の文庫に納められた。吉宗により、「庶物類纂」の編集の継続と完成を命ぜられた丹羽正伯は、1000巻の完成作業に取り掛かるとともに、これとは別に、日本国内の動植物を網羅したものを編纂する目的で、諸国に対して棲息する動植物等をすべて書き出させるように命じた。この結果享保20年から元文3年(1735~38)にかけて諸国から諸国の産物を記した帳面(通称「産物帳」)が提出された。これは、全動植物の名称を一覧化した帳面・絵図帳・注書の3種類で構成されていたらしいが、「産物帳」の編纂は、全国260藩を巻き込んだ一大プロジェクト事業であった。「庶物類纂」は原本が現存しているにも拘らず、幕府に納められた「産物帳」はその後散逸してしまい現在では全く行方不明となっていた。その後研究者により発見され、現在残されているものは、幕府に提出されたものの写し、諸藩に残された控えなどであり、しかも全国66ヶ国のうち、わずか13ヶ国に過ぎない。逸散した享保元文期の諸国産物帳を集成し第I期として発行されたものが、「享保元文諸国産物帳集成」である。また、江戸後期の文書を主に、各地の産物を網羅し第II期として発行されたものが、「江戸後期諸国産物帳集成」である。前者は盛永俊太郎、安田健編、後者が安田健編である。

おわりに

一般論として、鯢、鯢魚、ハンザケともサンショウウオ科、オオサンショウウオ科全般についての総称であって、その中で「大なるものは」と言っているオオサンショウウオについて述べているものと思われる。つまり、オオサンショウウオの幼生やサンショウウオ科のものを同じものとして扱っており、オオサンショウウオは単に大きくなったものを言っているにすぎないと思われる。

いずれにせよ、現在でも生態が完全に明らかにされていないオオサンショウウオがどのような位置付けで捉えられていたのか、大変興味あります。



6、岐阜県他の資料にみるサンショウウオ

研究員 池上優一

はじめに

岐阜県郡上市の金古弘之氏より、数回にわたってオオサンショウウオあるいはサンショウウオ類に関する資料を送付いただきました。前号に掲載した岐阜県のサンショウウオ方言地図とは別に、お送りいただいたいろいろな文献や資料にサンショウウオ(サンショウウオ科あるいはオオサンショウウオ科)について、どのような古名や地方名があるか整理してみましたのでここに紹介いたします。

1、岐阜県的美濃地方に係る資料などの紹介

まず、「サンショウウオ関係の記載のある」文献・資料・情報等を列記します。

- ①『郡上郡郷土史』(昭和37年発行)
- ②『長良川の生物』(S.32 岐阜県)
- ③『美濃白川ふるさと物語』(S.50年 下佐見老人クラブ)
- ④『飛騨の方言』(岩島周一 高山市民時報社)
- ⑤『逆引 飛騨の方言』(岩島周一 H.13年)
- ⑥『大和町史』(通史編下巻)
- ⑦『本草正譌』(1776年 松平君山〔尾張藩儒学者、地理学者〕)
- ⑧『金古氏情報』(手紙や指摘事項など)
- ⑨『権力者と江戸のくすり』(岩下哲典 1998年)

北樹出版)

- ⑩『日本魚名の研究』(渋沢敬三 角川書店 S. 34 年)
- ⑪『日本俗語辞典』(鈴木棠三 角川書店)
- ⑫『サカナの雑学時点』(新人物往来社)
- ⑬『美濃国・飛騨国産物帳の両生類』
(2005 年 金古弘之)

2、考察と整理

以上の文献・資料に記載されているサンショウウオ(サンショウウオ科及びオオサンショウウオ科)に関する古名と地方名を整理してみました。

まず、オオサンショウウオを表わす言葉の代表格は「ハザコ」でしょう。実際にオオサンショウウオが生息している区域では、「ハザコ」がオオサンショウウオのことを言っていることは生息確認に関する調査・研究資料などから確実と思われます。そして、金古氏の情報によると「羽佐古口」「羽佐古川」などの地名や河川名が実際に存在しており、それらの地名や河川名はかなり古くからの言葉ではないかと注目されます。

ただし数例ですが、ハザコでも小型のサンショウウオを言っている場合があるようです。特殊な言葉として、「トチロンベ」がありますが、ほんの一部地域の名称のようです。なぜそのような名が付いたかは是非とも知りたいと思います。

比較的多く用いられている言葉に「ヤマヒコベ」「タニヒコベ」というのがありますが、どちらも小型のサンショウウオに対して言っているのですが、一つは山、一つは谷であることを考慮すると次のように推測できます。

すなわち、ハコネサンショウウオもヒダサンショウウオも、卵や幼生は夏場までは小河川や水溜りで生活しますが、変態が終わると陸上生活に移ります。上陸後2年で成体となり、早春になると水域に降りて産卵し、その後また山間部に帰っていきます。従って、金古氏の指摘もありましたが、水中に棲む幼生に対して「タニヒコベ」、成体に対して「ヤマヒコベ」と称するのは納得のできる名称です。ただし、ハコネサンショウウオやヒダサンショウウオを「タニヒコベ」、「ヤマヒコベ」と区別するケースもあるようですが、生息域はハコ

ネサンショウウオの方が高い標高であり、区別する理由は明確ではありません。あえて言うならば、たまたま見つけた場所で呼んだものが伝えられたに過ぎないだけかもしれません。表を見ても、とにかくいろいろな名称が付いていることが分かります。

気になるのが「アンコ」「アンコウ」ですが、兵庫県から岡山県にかけてオオサンショウウオのことを「アンコウ」と呼んでおり、かつての京の都からその名称が各地へ伝達(?)する過程で、大小の区別なく名づけられてしまうことになったのか、あるいはオオサンショウウオの幼生を呼んだものと推測されます。昔から本草の対象(薬)と

各種文献・資料に記載された古名と地方名の整理表

(注一表中右から3番目はサンショウウオ・魚帝)

古名・地方名 標準名、分類名他	ヤマヒコベ	山シコヘ	タニヒコベ	ヒコベ	アンコ	アンコウ	ヤマカチ	チチコ	ヤマチチコ	ハザコ	ハゼコ	サンショウウオ・イオ	サンショウウオ・魚帝	オコゼ	トチロンベ
オオサンショウウオ							○			○		○	○		○
サンショウウオ(大小)		○								○		○			
両者(大型・小型)の幼生					○										
サンショウウオ	○		○				○	○							
サンショウウオ(愛知)						○									
サンショウウオ科										○	○				○
サンショウウオの成体	○														
サンショウウオの幼生			○		○										
カスミサンショウウオ						○			○						
ハコネサンショウウオ	○	○	○	○			○	○	○			○			
ヒダサンショウウオ	○											○			
ヒダサンショウウオの幼生															○

して利用されており、大型、小型のサンショウウオのうち、多く記載されている効能は小型のものに対してと思われます。ただし、オオサンショウウオは主に「生き血」が薬効ありということのようです。

最後になりましたが、これらの資料を提供くださった岐阜県郡上市の金古弘之氏(元高等学校校長、現在研究分野:植物分類地理学・生物民俗学他)に心より感謝申し上げます。 <続く>



イベント報告

きのこ観察会 【2009年10月17日】

事務局長 奥藤 修

市川源流域の自然に触れる試みのひとつとして取り組んでいる。トレッキング、バードウォッチングに続いて、第三段のキノコの観察会を計画する事と成った。

私の知っている地域のキノコといえば食用として採取している、シメジ、ナメタケ、クリタケ、シイタケ、コウタケ、マツタケくらいだ。昔はこの地域に特に多く生えて重宝されたのが「コウタケ(イボタケ科コウタケ属)」だ。このキノコは9月中旬からコナラやミズナラの南西向きの林に多く生えている。このキノコの特徴は、笠がジョウゴの様に上を向いて生えていて大きな物は手のひらサイズもある。直径2メートル以上の円形を描く様に生えて一度に沢山収穫できるため、地元の人は収穫したものを紐でつるして乾燥を行い保存食として重宝していた。味は大変強い香りが特徴で、煮炊きをすると黒い汁が出て、コリコリとした食感で大変美味だ。香りマツタケ味シメジなどと言われているが、コウタケは味の王様と高く評価され貴重なものだ。雑木林が少なくなった今日では幻のキノコになりつつある。今回、観察会の講師としてお願いし参加いただいたのは、横山了爾さん(兵庫県生物学会副会長)と、勉強中と言われいつも一緒に活動されている宇那木さんだ。とても熱心なご両人で、観察会までに2度も当地に来て事前踏査を行って頂いた。

7月中旬の事前踏査には、理事長の栃本先生に同行してもらい、研究所の北側正面にある「イノコ谷」を案内された。ここは、この地域でマツタケが生える場所として知られている所で、栃本先生は参加者に自生しているマツタケをぜひ見て頂きたいとの熱い思いがあったようだ。しかしこの場所は、多くの参加者が活動するには斜面が急で足場が悪いため断念し、新たな採取場所探しとして、8月初旬に第2回目の現地踏査となった。奥多々良木揚水発電所の連絡道路から、朝来町・生

野町の境界稜線を南に向かって進む場所で、アップダウンは有るが尾根を歩くために比較的安全で、眺望もよくキノコ採集には快適な場所である。2回の事前踏査においては、何れも多くの種類のタケが確認されているが、特に一回目に採取された「タマゴダケ(テングタケ科テングタケ属)」は大型で姿も美しく大変美味で珍しいタケだ。ぜひ本番ではお目にかかりたい。

開催当日は、あいにく雨模様の天候で、オリエンテーションもそこそこにして8台の車に分乗しキノコ狩りの現場へと向かった。山中は、好天気続きの影響を受け、山肌は湿り気を全く感じさせない状態でキノコの採集には最悪の条件である。しかし今年の山は木ノ実の大豊作、クリ、ドングリなどが斜面一面に落ちている。帰りの土産をま



コウタケ



オオムラサキアンズタケ

ず確保と、熱心にシバ栗拾いをしながら調理方法の談義に花を咲かすなど、和気あいあいの雰囲気の中で観察会の現地踏査が始まった。その内に、本命のキノコも少量ずつだが徐々に見付き、何と42種類も採取する事が出来た。これらをハンザキ研究所のミニホールに持ち帰り、種類別に分類してならべ、形、色、味、臭い、毒性等を五感で確かめながらレクチャーを受けた。キノコは原則食べられないと考えて、食する時は慎重に扱う事が大事であることや、無味無臭はより危険要素が高い事など、初歩的な心構えを身をもって教わったが、食べるためのキノコを探したいキノコ狩り人にとって、本日の体験だけではまだまだ不十分のようだ。

今回採集した目玉商品は「オオムラサキアンズタケ」で講師も長い経験の中で一度しか採取したことがないと言う珍しい代物だ。この山には、そ

こかしこに分散してかなりの量があった。

これらの希少なキノコが生える地域であることから、種類と質の良いタケを採取するため、湿度と気温がある程度高い季節が最適で有るとして、今回は初夏の開催を検討する事とした。



横山先生（左から2人目）の説明に熱心に聞き入る



黒川秋の陣「あんこうウォッチング」

【2009年11月3日】

事務局長 奥藤 修

「あんこうウォッチング」は毎年、黒川区の本村で、11月3日に行われるイベント「めっちゃおもろい黒川秋の陣」のイベントメニューの一つとして、既に10回目を迎えている。

日本ハンザキ研究所が設立される以前から、オオサンショウウオの専門家として、栃本先生(当時は姫路水族館館長)や大沼さん(当時は兵庫県自然保護協会神戸支部長)が「あんこうウォッチング」の講師としてイベントに協力をし、地域が、最も自慢でき、独自性があるメニューとして、この祭りを盛り上げる大きな役目を果たしてきた。また、ハンザキ研究所が設立されてからは、このイベントを源流域の自然や文化を効果的に紹介する良い機会ととらえてエコツアーを開催し、都市や近郊住民に広くイベントを紹介している。研究所の専門家も逐次講師として参加して知られざる生態とオオサンショウウオの住める自然環境保全の必要性を紹介し、ツアーの客はもとより一般来場者にも大変喜ばれている。

今年は、テントブースを作りオオサンショウウ

オの生態展示として、世界と日本の生息地や、産卵前の巣穴を守るために戦うオス同士の激しい闘争の様子や、卵から0～4、5歳までの成長課程をパネルで紹介した。また、生態調査実演では、田口勇輝講師(京都大学院生)により、京都市の



黒川秋祭りでのあんこうウォッチング

鴨川から捕獲され、ハンザキ研究所が保護管理している、中国オオサンショウウオと、これと日本種との交雑種を紹介した。見学者は、日本産との違いを、体形や肌の模様・性格の違いなど部位別に説明を受けて、現物を見比べながら熱心に説明を聞く来場者もいて関心の高さを伺わせた。

今後は、子供たちにも、より楽しんでもらえる工夫を重ね、地域イベントの核になれる「あんこうウォッチング」としてより良い成果を求めている。



黒川秋のエコツアー【2009年11月15日】

事務局長 奥藤 修

中国山脈の山中に有る市川源流、黒川地域の秋は高地にあるため近隣の地域よりも一足早く秋が訪れる。11月15日にもなると、近年まれに見る色鮮やかなグラデーションを楽しませてくれた紅葉も盛りを過ぎやや色褪せて見える。

今回のツアーでは、日本ハンザキ研究所が管理をしているオオサンショウウオ保護施設で、日本産、中国産、交雑種など、120匹以上いる実物を栃本理事長の案内で見学した。のち、オオサンショウウオの研究者 岡田純講師(鳥取大学院)によ

り、鳥取県の河川で調査されたビデオを用いて、クイズなどを取り入れ、解りやすく参考になるオオサンショウウオの話聞いた。またこの日、偶然来所されていた黒川小・中学校卒業生で、現在加古川に在住しているが「懐かしさもあり黒川の風景写真をたびたび撮りに来ている」と言う長橋慎一さんにも参加して頂いた。

オオサンショウウオの話が終了した後、研究所を後にして、この地域の豊かな自然や文化を満喫して頂くために、黒川本村にある古刹「雲頂山大明禅寺」を訪れた。山門を抜けると正面に、萱葺き入母屋造りの歴史を感じさせる建物「開山堂」が迎えてくれた。美濃からきて、開山上人として慕われた「月庵宗光禅師」と、その高德に感銘し千石千貫を与え帰依したと云われる山名時熙公（巨川常熙）や、山名氏の家来で丹波市の青垣町山垣・岩本城主 足立宗次入道左エ門尉基高（宗次入道）が祭られている。などと、同行した私が説明を行い、南北朝時代から今日まで時代に翻弄されながら守り継がれた、同寺の歴史ロマンを少しは感じて頂けたのではと思う。



プロジェクターで説明する岡田講師（左から3人目）

次に来た場所は、本村集落に覆い被さるようにそそり立つ、高さ98mのロックフィールドダム堰堤と風力発電風車。ここから見る黒川ダム湖は、濃い緑色と透明感のある水面に浮かぶ山の紅葉が、西日を受けてより鮮やかに光り輝いていた。

朝来町との稜線にある青倉山山頂付近の林道から、揚水発電所と下部ダムを眼下に見下ろす。紅葉の絶景ポイントでは、切り立った岩肌が露骨に張り出し、その岩肌にしがみつくように張り付く木々が見事に紅葉して四方に広がっている。バス

を降りた子供たちは、その光景に、思わず歓声を挙げて走り廻り自然の中の解放感に浸っている。同行した大人たちも感嘆しきりで、色鮮やかに紅葉した谷間をバックに記念撮影を何度も行いながら麓におりて来た。

麓の集落の畑では、地元特産高原野菜として、おいしいことで評判の大根や白菜・蕪・ニンジンなど野菜のもぎ取り体験を行った。得た食材はきっと本日の主役として食卓に上ると思う。

この後、すべすべした肌触りが人気で「美人の湯」として親しまれている黒川温泉に入浴して旅の疲れを癒しツアーを終えが、マイクロバス車内の後姿が数人の影だったのは寂しい限りだった。



ひょうごエコフェスティバル 2009 【2009. 11. 14~15】

事務局 藤原 進

晩秋の11月中旬に豊岡市日高町神鍋高原において「ひょうごエコフェスティバル 2009」が開催された。

ハンザキ研究所もそのフェスティバルに参加。13日には展示パネル等を運び込み、開催先が用意しているテントに飾り付けを行った。



前日にパネル展示の準備

14・15日が本番。しかし、14日はあいにくの雨。足元が悪い中、沢山の来場者でにぎわったようであった。私は15日に会場入り。昨日は雨であったがその日は大変良い天気恵まれ、フェスティバル日和であったが、朝のうちは非常に寒く身を縮めて対応に勤しんだ。

出展件数はかなりあり、中には場違いでは？と思う出展者も居て、大変ユニークであり目を楽しませてもらった。

ハンザキ研究所の展示は、パネルのみ（パソコンでの黒主放映はしていたが・・・）であり、中々見学者が立ち寄りにくい感じであったが、日が差し込んでくると同時に人々が訪れてくれるようになってきた。

見学者にオオサンショウウオの説明をしたのだが、見学者より少し知識がある程度で、もっと勉強をしておけば良かったと後悔すでに遅しの感があり、大変申し訳なく思った。

両隣の展示場は見学者が入れ替わり立ち替わり商売繁盛？でした。一方ではお土産を餌に、呼び込みも盛んでそれに釣られて老若男女がわんさか々。

もう一方では、海の生き物、川の生き物を展示し、直に触らせる作戦。子供が興味を持ち立ち寄れば、自然と親も立ち寄る羽目に・・・。

此方も本物を持ってくれば、両隣の非ではないはず●と思いチョット悔しい思いをしたのは自分だけだったのでしょか？

会場を少し見て回ったのですが、自然を大切に思う様子がありありと感じ取られる処が随所にあり、お遊び感で参加している自分が申し訳なく感じる日であった。

このような機会があれば又参加し、少しでも知識



パネル説明に聞き入る参加者

を吸収する機会を持ちたいと思い、心新たに一日を終えた。



三井物産環境基金 助成団体交流会に参加して

事務局 黒田 哲郎

1月28～29日、当研究所が助成を受けている三井物産環境基金の助成団体交流会へ参加しました。我々は発表しませんので、分科会形式で開催されている各団体の発表を聴講しました。



三井物産は皇居に隣接

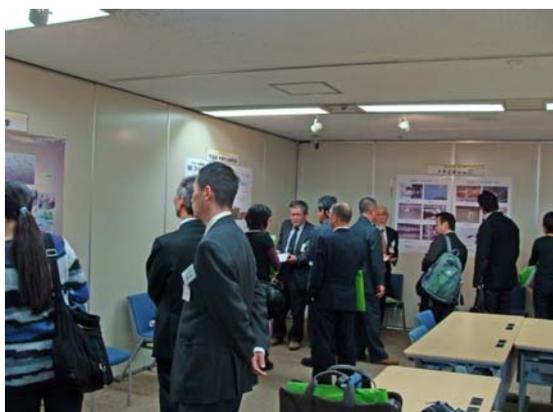
その中で NPO 法人 トキどき応援団の発表を聞く機会があったのですが、我々と同じ特別天然記念物を対象にした活動を行っているということで、楽しみにしていました。ただ、トキどき応援団は、トキの調査・研究を行っているのではなく、トキの生息出来る環境を整備することを主な活動にされているようです。

ここは当研究所と比較しても、非常勤スタッフの数や団体の会員数、経常収入に近いのですが、三井物産環境基金から受けている助成額は、助成期間が我々より1年多いとはいえ、3.3倍の金額です。これだけあれば、さぞかし思い切った活動が出来ることでしょう。

ただ、それ以上に驚いたのは、企業の CSR（社会的責任）活動を積極的に呼び込み、協働によって活動を推進していることでした。聞いただけでも三井物産、NEC、新潟大学など、そうそうたる団体とタッグを組んで活動されています。この点は、我々も大いに参考にさせていただきたいと思いました。

発表が面白かったので懇親会の際、トキどき応援団の理事長、理事の方とじっくりお話をさせていただきました。お酒が入って口もなめらかになっていたこともあり、「トキ」という注目度の高

い鳥だけに、市内に約 20 のトキに関わる団体があるが、現在はバラバラに活動しており、ネットワークの構築はやっと始まったところだということ、ビオトープを整備しているところは山の中であるが、野生動物が少ない場所にも関わらず、ヤマビルが多く、活動に支障をきたしていることなど、発表にはなかった裏話や苦労話を数々聞く事ができ、大変有意義でした。佐渡の金山・生野の銀山、特別天然記念物のトキ・オオサンショウウオと何かと比較できる共通のアイテムがあったことも話を弾ませるきっかけの一つとなりました。また、トキどき応援団のあるメンバーの方は「私は 2 年後の佐渡市長選に出ます！（かなり酔っておられましたが）」と仰っていたので、市長当選後は是非とも生野と交流を、とお願いしておきましたが、はたしてどうなることやら。それはともかく、全般的に年齢・性別に関係なく、とにかく個性的でバイタリティ溢れる方が多かったことが印象的でした。そしてこれ以外にも、コンサルタントである講師の方の興味深い話を聞き、充実した交流会となりました。



パネル展示の様子

ただ、二日間の交流会が終わって解散し、黒川へ戻ろうとすると、何と東海道新幹線の架線トラブルがあり、東京駅で 6 時間の足止めをくらいました。新幹線に乗ることができたのは 22:00、姫路駅に着いたのが 1:00、黒川へ帰り着いたのは 3:00 でした。色々な意味で濃密な二日間となりました。

追記：この原稿を執筆中に、佐渡トキ保護センターにおける事件の一報が飛び込んできました。

身近に感じられるようになった佐渡だけに私も心が痛みますし、関係者の方々の落胆ぶりが目に浮かぶようです。再び同じことが起こらないように最善を尽くし、これからも頑張っていたきたいと願うばかりです。そして奇しくもこの日は 3 月 10 日、佐渡の日でした。



～平成 22 年度のイベント計画～

- 5 月 1～5 日：ゴールデンウィーク公開
(今年で 3 年目ですが、日本ハンザキ研究所及びあんこうミュージアムセンターを公開します。案内と解説をします。)
 - 5 月 29 日 (土)：河畔林、野草等観察会
 - 6 月 19 日 (土)：モリアオガエル
産卵観察会
 - 7 月 24 日 (土)：キノコ観察会
 - 7 月 31 日 (土)：オオサンショウウオ
夜間観察会－第 1 回
 - 8 月 18～22 日：黒川キッズ・ラボ
夏休み宿泊型農業体験と自由研究など
 - 8 月 28 日 (土)：昼間－水辺観察会
夕食－アフリカ料理
バーベキュー
夜間－オオサンショウウオ
観察会－第 2 回
 - 9 月 25 日 (土)：オオサンショウウオ
夜間観察会－第 3 回
 - 10 月 23 日 (土)：野鳥観察会
 - 11 月 3 日 (休日)：秋祭りあんこうウォッシングとエコツアー
 - 11 月 13 日 (土)：秋のトレッキング
紅葉狩り
- (詳細は、事前にお知らせします)

雑言・提言・独言

地域まるごとミュージアムを目指す

事務局長 奥藤 修

その日は極寒の朝でした。午前7時30分、麓まで真っ白にした初冠雪と時折降る初冬の時雨、気温マイナス4度の身を切るような寒さの中で、其々、思い思いの身支度をした地元の人たちが集まり“めっちゃおもしろい黒川秋の陣”のイベント開催準備が始まった。

今年は、1999年の夏から始まった本イベントの中で“あんこうウォッチング”のネーミングを使いオオサンショウウオの観察会を始めてから、早10年目を迎え節目の年となる。

今年は「NPO 法人 日本ハンザキ研究所」がこのメニューを担い、テントハウスのブースで、オオサンショウウオの生態パネル展示と解説、講師による生態調査の実演を行う事となった。

振り返れば、当時のウォッチングは他愛もなく稚拙なものであった。国の特別天然記念物であることでネームバリューが高く、地元には沢山いて夜行性で人目に付きにくい、このオオサンショウウオを「イベントのお客に見て楽しんでもらうと良いのでは」の発想で“あんこうウォッチング”を計画した。橋の上から餌を巻き、あんこうが現れるのを待つと言う簡単な方法だ、このような形でも参加者達はあんこうが出てくると、大人も子供もキャー、キャー言って喜んでくれた。

数年後、もう少し本当のオオサンショウウオの生態を参加者に知って貰えたらと、生野町役場の方に、この地域をフィールドとして頻りに調査を行っている姫路市立前水族館長 栃本武良先生

(現日本ハンザキ研究所理事長)を紹介して頂き講師のお願いもして頂いたように思う。栃本先生の紹介で最初に来ていただいたのは、兵庫県自然保護協会理事の大沼弘一(日本ハンザキ研究所副理事長)さんと、何時も一緒に活動されている川上徳子さんであったと思う。

今回の展示には、日本ハンザキ研究所 栃本武良所長が(旧)黒川小中学校に拠点を構えてから、観察記録された繁殖時期の様子や、卵やふ化の様

子・4～5年目までの幼生等々を目玉として、オオサンショウウオの知られざる成長課程を生態写真パネルで紹介し、実演では、中国オオサンショウウオと、国産種との交雑によるハイブリッドの紹介をおこなった。京都市の鴨川で交雑が頻りに繰り返されて増殖し、河川全域に及んでいる現実を田口勇輝講師(京都大学院生)により紹介をして頂いた。此のことで、何れの地域に於いても固有種を脅かす外来生物の脅威があり、固有種保護が喫緊の状況にあること等を感じて頂いたと思う、地域における自然環境保全や再生が声高に叫ばれ紙面をにぎわす今日に於いて、身近な自然環境を注視する体制作りや調査をすることの重要性を、地元の人々や近隣都市の来場者の方々に共感を得たと思う。



2007年－栃本講師



2008年－柿木講師

市川源流、黒川地域の起こりは、1367年(南北朝時代)、美濃の月庵宗光禅師が雲頂山大明寺を開基して開けた集落で、海拔500m以上にも及ぶ高地の山中にあるため、陸の孤島、秘境黒川といわれていた。その生活は厳しい自然環境の下で、農林業を主体とした自然の中での循環型エコ生活であったようだ。国の林業政策により、広葉樹林が針葉樹に変わり、また、1972年の県営生野ダム、1974年には奥多々良木揚水発電所上部ダム(黒川ダム)など相次いで完成したダムの影響で、自給自足生活の要であった山々が水没により消滅していき生活風土も徐々に移り変わっていった。これと同時期に起った第一次オイルショック以降、地域の生活も大きな変化をみせ、経済成長のもと地元を離れていく住人が急速に増えていった。現在も高齢化が進行し人口減少の一途をたどるが、時代を担う人への世代交代は遅々として進んでいない。

しかし、この地域は、南北朝時代から六百数十年にも上る歴史を誇り、往時からの歴史を物語る生活文化や、秘境といわれる自然環境の中で育まれた貴重な動植物が弛まなく息づく悠久の里でもある。

これらを生かすべく地域への提案として、(旧)黒川小中学校を拠点とした屋根のない博物館“あんこうミュージアム”を提唱して既に丸5年目を迎えている。2009年度には、この施設に、日本ハンザキ研究所の訪問客も含め、年間3,000人もの人が訪れている。これらは、今後の活動の源泉として多に期待が持てるものだ。

地域として、これらの外部エネルギーを有効に活用し地域づくりの情報を発信していく事が重要である。そのためには、生活の中での一寸した工夫や考え方がそれを果たすと思う。たとえば、有機堆肥の土づくりや減農薬・無農薬の野菜や米作りであり、不耕作地や未整備山林などを解消する取り組みなどだ。これらを個々でするのは無く、集落全体で取り組む姿勢を示す事で、多様な生態系を守る役目を果たし自然環境保全を実践する価値ある活動となりえる。地域が自分たちの生活文化を継承していく事や、源流域の自然を保護する意識を地域全体で共有し体系化していくことで、地域としての高い存在感を示せると思う。



話題など

あんこうクッキー

理事 齊藤 敬子

いくの銀谷工房一番の人気者、何と言っても「あんこうクッキー」です。「まあ、これなーに。」に始まり、「まあ可愛い。」って手にしていただけます。そこから、オオサンショウウオの話になり、お客さんとの会話が始まります。

「へー、そうなんやー。そんなに居るの？水がきれいなんやねー。」

どんどん話がはずむと、うれしくなりますね。

そして、ハンザキ研究所の話になり、お客さんは、黒川へ。

あんこうクッキーが完成するまでにも、本当に苦労したなあと、改めて思いますね。

わたしたち、いくの銀谷工房の出発点は生野紅茶から始まりました。そして、その紅茶を使って生野紅茶クッキーが出来上がりました。

あんこうグッズをつくり始めていた頃、紅茶クッキーと同じ味のあんこうクッキーがあったら面白いだろうなと、思っていました。型が無い。つくってくれそうなどころも知らない。「無理かな」と思っていたところに、「見つかった」との連絡、ところがお値段を聞いてびっくり。

でも、皆の「何とかなるわ」の声。いつも前向きな銀谷工房の面々。「じゃ、いこう。」これが始まりでした。

“可愛い”、“一枚100円と手ごろな値段”、“説明も付いている”これが受けたのでしょうか、一番の人気者となりました。そして、小さなサイズも作りました。型代はいつになったら元がとれるのかなと、笑いながら作っています。

目の付け方で、それぞれ表情が違うそうです。お客さんは、選んで選んで・・・(笑)。

昨年、ハンザキ研究所の依頼を受けて作った小さいあんこうクッキーの一枚入りが評判だったので、デビューさせようかと出番を待っています。

いくの銀谷工房は、本当に小さい小さいグループですが、つくづく面白いグループだと感じています。「それぞれが自分にできることをする。」これがいいのかなと思いつつ、今日もあんこうクッキーを作っています。



あんこうクッキー小型(上)、大型(下)

(いくの銀谷工房代表)



『のりこえ枡 (マス)』 秘話

理事 竹村 真澄

このアイデアの元になったあんこうは、丹波市の陶芸家の方にお願ひして書いていただいたイラストの中にありました。

壁を乗り越えようとする何とも愛らしい姿のあんこうに一目惚れ。

さっそくハンザキ研究所のキャラクターとして使わせていただくことにしました。

その陶芸家さんも陶器に絵付けをして焼き上げたフリーカップなどのあんこうグッズを作ってくださり、ハンザキ研究所の参加するイベントなど



のりこえあんこうフリーカップ

で販売していました。

そのかわいいキャラクターを見ていた研究所のスタッフたちが閃いたのです！「これはまさに『のりこえあんこう』そのものだ！」と。

オオサンショウウオは繁殖期になると、いい巣穴を目指して川の上流に向かっていきます。

途中で大きな堰（せき）があっても登っていきます。何度も何度も滑っては登りを繰り返して、手足やおなかの皮を擦りむきながらも、その堰を乗り越えようとします。

そんな姿を私たちも見習って、粘り強いあんこうの力にあやかりたいと、『のりこえ枡 (マス)』の製作を思いついたのでした。

受験や就職はもちろん人生の様々な困難に出合ったときに乗り越えられるようにとの願いを込めて作ることにしました。

描いていただいたイラストを元に焼印を作り、木の板に焼き付けてみました。焼き付けの時間に

よって濃くなったり薄くなったりとなかなか難しく、スギやクリなどの材質の違いによっても焼き付き方が変わることがわかりました。

焼印は三種類。あんこうの顔のアップとよじ登る後姿。そして黒川の地域全体を自然の博物館と考えた黒川あんこうミュージアムの英文字“kurokawa ankou museum”を前や後ろ、横などに色々つけてみて、一番おさまりのいいデザインに決定。

枡は日本産にこだわってインターネットで見つけた岐阜の会社に注文しました。

国産ヒノキで作られた一合枡が入ったダンボールを開けると、ヒノキの香りが部屋中に広がりました。精巧に作られた美しい枡に焼印を押すのは一発勝負で緊張しながらの作業になりますが、木の焼ける匂いの下からのほほんとしたあんこうの姿が出てくるのを見るのは、何とも癒されるものです。

こうやって出来上がった枡を研究所の保護プールで飼育されているオオサンショウウオの前に置いて「みなさんの困難が乗り越えられますように」と祈願して『のりこえ枡』が完成しました。

ハンザキ研究所のブログにアップしたところ、朝日新聞の記者の目に止まり取材を受け但馬版に載せていただけました。その日からさっそく研究所にお越しいただいた方もあり、反響の大きさにビックリしています。

みなさんのお手元でこの『のりこえ枡』が力になってくれることを願いつつお渡ししています。



新グッズ『のりこえ枡』



編集後記とお知らせ

編集長 竹村真澄

『あんこう第4号』をここにお届けします。
月日の経つのは本当に早いもので、あっという間の半年です。今年も調査研究をはじめ、いろいろのイベントや環境学習を計画しています。是非ご参加ください。

ご覧いただき、お分かりのようにこの会誌も、限られた投稿者になってきています。

そこで、編集室からのお願いですが、できるだけ多くの皆様からの投稿をお願いしたいと考えています。あまり、堅苦しくなく書いていただきたいのですが、ただ自由と言っても書きづらいかもしれませんので、次のテーマで投稿をお願いしたいと思います。

<募集テーマ>

- (1) 環境問題で日頃考えていること
- (2) 動物や植物のこと（ペットでも可）
- (3) 日常の食材などの話題（家庭園芸も可）
- (4) 旅の思い出（国内、海外を問いません）
- (5) 幼い頃の生き物の思い出
- (6) お住まいの街や村のお国自慢
- (7) 参加したイベントの感想

<形式>

字数は多くても少なくてもかまいません。原稿用紙や便箋に書いていただいて結構です。またパソコンのワードやテキスト文章と共に掲載写真などもメールで送って頂いても結構です。

<締め切り>

平成22年9月（第5号）に間に合えばいいのですが、締め切りを7月末日とします。

<送付先>

ハンザキ研究所の住所、あるいはハン研メールアドレスで、事務局宛にお送りください。

<注意>

著しく当法人の主旨にそぐわない内容であると判断される場合は、掲載できない場合があるので、ご了解ください。



発行 2010年3月31日

特定非営利活動法人

日本ハンザキ研究所

兵庫県朝来市生野町黒川 292

電話/FAX: 079-679-2939

e-mail: info@hanzaki.net

HP URL: <http://www.hanzaki.net>



(本誌は「三井物産環境基金」の助成を受けて作成しています。)